

保育者養成課程学生の遠隔授業に対する意識

阿部弘生・宮下 通・奥山優佳

I. はじめに

I-1 背景

2020年1月に発生した新型コロナウイルス感染症の猛威は、現時点（2020年12月1日）においても止まることはなく、その状況は深刻化しており、あらゆる教育機関でも対策を強いられる状況が続いている。

文部科学省からは2020年3月24日に「令和2年度における大学等の授業の開始等について」¹が通知され、当初より一斉臨時休業の対象となっていなかった大学及び高等専門学校に対して、2020年度の教育研究活動の開始に向けた準備として「遠隔授業の活用」を含めた7つの留意事項が示された²。その後も、大学に対する教育・研究への通知が再三なされている³。さらに、2020年3月2日に厚生労働省より「新型コロナウイルス感染症の発生に伴う指定保育士養成施設の対応について」⁴が示され、保育実習への対応が周知された。また、8月11日には文部科学省より「教育職員免許法施行規則等の一部を改正する省令の施行について」⁵が通知され、教育実習への対応が示された。文部科学省による2020年5月12日時点での報告では、全国の私立大学の97.5%が遠隔授業を実施、もしくは検討している⁶。研究を取り巻く動きとしても、

¹ 文部科学省（2020）「令和2年度における大学等の授業の開始等について（通知）」（令和2年3月24日 元文科高第1259号）pp. 1 - 10.

² 2020年3月24日に2020年度の授業の開始等について、「1、大学等における感染拡大の防止について」「2、学事日程等の取扱いについて」「3、遠隔授業の活用について」「4、授業料等の学納金に係る取扱いや学生の就学支援について」「5、留学生に関する配慮について」「6、学生に対する配慮について」「7、非常勤職員等の業務体制の確保に関する事」の7項目が留意事項として文部科学省より通知された。

文部科学省（2020）「令和2年度における大学等の授業の開始等について（通知）」pp. 2 - 9.

³ 文部科学省ホームページ「大学・大学院・高専に関する情報」

https://www.mext.go.jp/a_menu/coronavirus/mext_00016.html（令和2年12月1日閲覧）

⁴ 厚生労働省子ども家庭教育保育課（2020）「新型コロナウイルス感染症の発生に伴う指定保育士養成施設の対応について」（令和2年3月2日）

⁵ 文部科学省（2020）「教育職員免許法施行規則等の一部を改正する省令の施行について（通知）」（令和2年8月11日 2文科教第403号）

例えば様々な学会大会がオンラインで開催されるようになってきている。さらには発表の枠組みの中に新型コロナウイルス感染症関連の分野を設けている学会も出てきている⁷。

そして、9月15日に文部科学省から出された大学・高等専門学校に対して行った調査の結果（調査回収期間：8月25日～9月11日）によれば7月1日に遠隔授業あるいは遠隔授業と対面授業を併用していた大学等の割合が1,069校のうち896校（83.9%）であったことに対して、後期授業は1,060校のうち1,054校（99.4%）が全面対面あるいは遠隔授業と対面授業を併用する方針で進めているとしている⁸。後期には可能な限り対面授業を実施する方向への動きを多くの大学がみせてはいるが、遠隔授業、対面授業の両方の視点で授業内容を考えざるを得ない状況が続いている。

さて、東北文教大学・東北文教大学短期大学部（以下、本学という）も多分に漏れず、5月11日より授業を開始し、6月8日まではGoogle Classroomを用いたオンデマンド型遠隔授業を実施した⁹。本学のオンデマンド型遠隔授業では、pdfファイルによる資料の掲載、Google ドキュメントやGoogle Formsによる出席の確認、授業課題の回答等を中心として行っている。Google Classroomの使用方法等に関しては、4月23日に教員研修会が開催された。また、遠隔授業開始前に学生サポートクラス、教員サポートクラスがGoogle Classroom内に設置され、使用方法、練習問題、機器環境への対応に関する説明や質問の受付等が学生・教職員の両方に向けて行われている。さらに、各授業担当者によってGoogle Classroom内にクラスが設置され、学生には、クラスのIDの一覧を本学アカウントのGmailにて配布するという手立てが取られた。

6月9日以後は、様々な活動に一定の制限を設けながら対面授業を実施している。実際の授業に関しては、換気の推進や座席指定等の対策をしている。教育機関によっては学生数を分散した形による授業、遠隔授業と対面授業を組み合わせた授業等が実施されているが、本学に関しては原則全ての科目においてこれまで通りの対面授業を実施している。また本学子ども学科では、前期に実施を予定していた保育実習を後期に延期し、実施の際も2週間前から行動記録をつけることとしている。教員の実習指導に関しても今年度は全て電話やメール、Google Meet等を利用し従来の直接実習先を訪問する形での指導は行っていない。

上記に述べたような遠隔授業の実施に関しては、厚生労働省から示された「新しい生活様式」の実践例等に照らし合わせながら考えていったものであるが、実際に授業を受けている側の視点に立ってみると具体的にどのような課題が浮かびあがってくるのであろうか。内藤（2020）は遠隔授業が開始して間もない4月の段階における学生

⁶ 文部科学省（2020）「新型コロナウイルス感染症対策に関する大学等の対応状況について（令和2年5月12日時点）」

⁷ 例えば、乳幼児教育に関する学会としては、日本乳幼児教育学会第30回大会（2020年11月14日、15日開催）では「新型コロナウイルス感染症対策」の発表分野が設けられ8件の発表がなされている。

日本乳幼児教育学会第30回大会（2020年11月14日・15日）大会プログラム、p.58.

⁸ 文部科学省（2020）「大学における後期等の授業の実施方針等に関する調査結果」（令和2年9月15日）p. 1.

⁹ 本学では、周辺の様態等を鑑み、全15回のうち5回目までの授業をオンデマンド型遠隔授業で実施した。

の実態に関する調査を情報通信機器環境の視点から実施している。その調査項目は大いに参考になるところではあるが、「本アンケートは筆者が、担当科目の受講生の実態を把握するために作成したものであり、アンケートの項目設定や質問の順番等が適切でない可能性がある」¹⁰と内藤自身が述べていることから伺えるように、今の事態に関する調査・研究は当然のことながら十分ではない。だからこそ、細かな調査の積み重ねが、今後の検討に対する一助となると考えられる。

2020年3月24日に示された文部科学省の通知によると、面接授業の一部を遠隔授業にする場合は面接授業により得られる教育効果を有すると認めるか否かが単位修得の前提として考えられており¹¹、同年5月22日に示されたQ&Aによると、オンデマンド型遠隔授業については設問解答・添削指導・質疑応答等・学生の意見交換の機会確保を実質的にでも行うことが面接授業に相当する教育効果を担保するために必要と示されている¹²。一方で三苦ら（2020）は「『理解と学びやすさにおいては、オンデマンド型遠隔授業が、教室での対面授業より優れている』と学生が感じている」¹³ことを調査結果から述べ、知識・概念の修得に限定した時は予習・授業・復習一体型であるオンデマンド型の方にメリットがあることを述べている。ただし、対面授業が態度・学修の姿勢、リサーチマインド・国際性の涵養も含んでいることから、知識・概念の伝達のみで終始してしまうオンデマンド型授業のデメリットについても述べている。理想的には、どちらの良さも生かしつつ、学生の学びにつながる授業を追い求めていく必要があり、今後、どちらのほうが良いという答えを導き出すよりも、遠隔授業と対面授業それぞれのメリットについても語られていかなければならない状況におかれていることが示唆される。

遠隔授業の充実をはかるのか、遠隔授業が学びを止めないというスタンスをもつのか。遠隔授業の実施が長期に及べば及ぶほど、後者の意見が淘汰されていくことは想像に難くない。したがって、対面授業と遠隔授業双方のメリット・デメリットに関して、実際に授業を受けている学生からの意見を集約することは、本学はもとより各関係機関への指針としても役立つものになろう。我々が直面した未曾有の事態はいまだに出口が見えておらず、課題は山積されている状況である。そのため、現状の把握に努め、今後の在り方を検討する必要が当然のことながらある。さらには、これまで当然のこととして行われてきた対面による授業の見直しも同時にはかれるべきであり、遠隔授業と対面授業の両面から授業改善を考えていく状況にあるといえる。この辺りに本研究の問題の所在がある。

I-2 目的

本研究では、遠隔授業に関する受講環境を把握すると共に、遠隔授業、対面授業そ

¹⁰ 内藤徹（2020）「同志社大学商学部生の遠隔授業環境に関するアンケート調査結果報告書（資料）」：『同志社商学』第72巻，第2号，p.287.

¹¹ 文部科学省（2020）「令和2年度における大学等の授業の開始等について（通知）」（令和2年3月24日 元文科高第1259号）

¹² 文部科学省（2020）「学事日程等の取扱い及び遠隔授業の活用に係るQ&A等の送付について（令和2年5月22日時点）」

¹³ 三苦博・原田芳巳・山崎由花・内田康太郎・五十嵐涼子・大滝純司（2020）「対面授業は、オンデマンド型授業より優れているのか？」：『医学教育』51-3，p.267.

れぞれに対して感じるメリットとデメリットを受講者側の視点から把握し、今後の授業改善に向けた一資料を得ることを目的とする。

I-3 研究方法

(1) 対象

本調査の対象は本学子ども学科の1、2年生である。調査に関しては前期と後期の2度行い、前期は「教育方法論」(履修者:2年生99名)および「現代子ども論」(履修者:1年生89名)、後期は「保育・教職実践演習」(履修者:2年生98名)、「保育内容(健康)の指導法」(履修者:1年生88名、2年生1名)の授業を利用して行った。結果として、本学子ども学科に在籍する全員を対象とすることができた。

(2) 方法

調査は、Google Formsを用いて記名式で行った。回答の際は説明文を記載し、設問に対して、何かを調べて答える必要はなく、あくまで自分の知識や記憶、考えのみで答えることを伝えた。倫理的配慮としては、授業改善や研究の目的以外で使用しないこと、分析の際、個人が特定されることがないこと、回答は任意であり回答しなくても不利にならないことを説明文に記載した。前期の調査に関しては遠隔授業を利用して行ったため、上記の説明に関しては対面授業開始後も改めて説明し、後期は口頭でも説明を行った。

(3) 調査期間

【第1回目】

2020年5月27日(2020年5月27日14時52分36秒~2020年5月27日15時55分47秒)、
2020年6月6日(2020年6月6日8時52分4秒~2020年6月6日9時52分57秒)

【第2回目】

2020年12月2日(2020年12月2日14時24分41秒~2020年12月2日18時57分8秒)、
2020年12月3日(2020年12月3日8時47分31秒~2020年12月3日10時39分52秒)

(4) アンケート内容

本アンケートでは以下の質問を設定した。なお、第1回目の調査に関しては、質問4~7を本研究の対象とする。

【1回目】

- 1 高校にあった視聴覚教材・デジタル機器を教えてください。
- 2 中学校にあった視聴覚教材・デジタル機器を教えてください。
- 3 小学校にあった視聴覚教材・デジタル機器を教えてください。
- 4 現在の遠隔授業で感じるメリットを教えてください。
- 5 現在の遠隔授業で感じるデメリットを教えてください。
- 6 遠隔授業を行うとして、現在の遠隔授業のやり方は賛成ですか。
- 7 6のように答えた理由を教えてください。
- 8 保育を実践する場合、視聴覚教材にはどのようなものが考えられますか。(どの場面で、どのように活用できると思いますか。)
- 9 保育の現場で視聴覚教材やデジタル機器を用いることは賛成ですか。
- 10 9のように答えた理由を教えてください。

【2回目】

- 1 遠隔授業と対面授業ではどちらの方が理解しやすく、学びやすいと感じますか。（遠隔授業の方が理解しやすく学びやすいを「5」、対面授業の方が理解しやすく、学びやすいを「1」として5段階で評価）
- 2 1のように答えた理由を教えてください。
- 3 遠隔授業と比べての、対面授業で感じたメリットを教えてください。
- 4 遠隔授業と比べての、対面授業で感じたデメリットを教えてください。
- 5 あなたの現在の居住地（自宅・下宿など）でインターネットに接続する環境がありましたか？（「あった、なかった、遠隔授業のために新たに設置した」で回答）
- 6 あなたは遠隔授業を受講したことによって、通信量制限を受けましたか？（「はい、いいえ」で回答）
- 7 遠隔授業の期間中、主にどこで授業を受けていましたか。（複数項目から選択）
- 8 遠隔授業を受ける際に利用した主なネットワーク接続機器は何ですか？（複数項目から選択）
- 9 遠隔授業の期間中、プリントアウトの必要性があった（必要だと感じた）授業はありますか？（「プリントアウトを求められる授業があった、プリントアウトをした方がよいと感じた時があった、プリントアウトの必要性はなかった（感じなかった）」から選択）
- 10 遠隔授業の期間中、プリントアウトの必要性がある場合、あなたはどこでプリントアウトを行いましたか（行ったと思いますか）？（複数項目から選択）
- 11 遠隔授業のために新たに準備（購入）したものはありますか？（複数項目から複数回答可で選択）
- 12 遠隔授業を受講した際の疲労度を教えてください。通常の対面授業と比べて評価してください。（対面授業よりとても疲れたを「5」、対面授業より疲れなかったを「1」として5段階で評価）
- 13 遠隔授業と対面授業のどちらの方がよいと思いますか。（対面授業の方がよいを「5」、遠隔授業の方がよいを「1」として5段階で評価）
- 14 13のように答えた理由を教えてください。
- 15 遠隔授業と対面授業の両方を経験したことで、伝えたいこと（要望や感想など）があれば記入してください。

上記の調査においては、選択式と記述式それぞれの回答を求めている。そこで、記述式の回答については、16の項目に分類できた。分類する際の視点は表1に示した。分類に関しては筆者らで行った。

表1：記述回答の分類と分類の視点

分類	分類の視点
意見共有	他者との意見共有や意見交換に関する記述
学習環境	学習を受ける上での周辺の環境に関する記述
学習スキル	ノート作成やメモ、文章作成や機器操作等に関する記述
学習負担	身体的負担、精神的負担に関する記述
学習理解	「わかりやすさ」のみに関する記述
感染対策	感染症に関する記述
経済面	授業を受ける上で発生する費用に関する記述
時間	学習時間に関する記述
実践(演習)	実技やグループワーク等の演習に関する記述
質問(相談)	主に教員に対する質問や相談に関する記述
主体性	自ら学びに向かう姿勢に関する記述
資料	授業における資料に関する記述
場所	授業を受ける場所に関する記述
なし	回答に対する理由を「なし」とする記述
その他	いずれの分類にも当てはまらない記述

(5) 回収状況

第1回目の調査に関する回答総数は185であった(2年生97、1年生88)。回答率は2年生が97.0%、1年生が98.9%であった。第2回目の調査に関する回答総数は、181(2年生97、1年生84)であった。回答率は2年生が97.0%、1年生が96.6%であった。

II. 1回目調査結果

II-1 遠隔授業に対して感じるメリット

「現在の遠隔授業で感じるメリットを教えてください」という設問に対する回答の総数は303(2年生148、1年生155)であった。最も多かった回答は「場所」(78)であった。次いで、「学習環境」(51)、「時間」(47)、「資料」(29)、主体性(28)であった(図1)。最も多かった「場所」に関しては、移動時間や身支度、忘れ物をしなくて済む等の準備負担、睡眠時間や忘れ物や遅刻をしない等の通学に

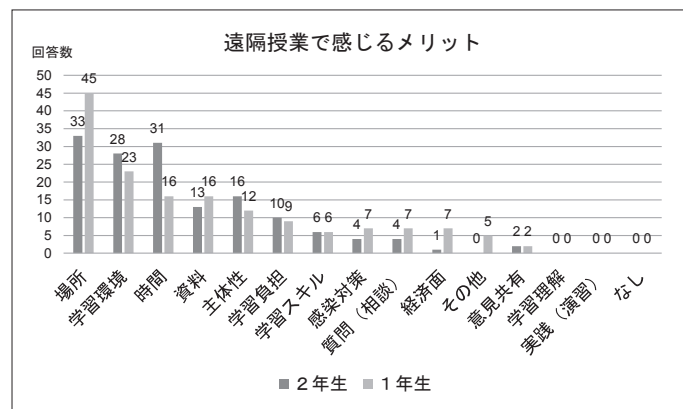


図1：遠隔授業で感じるメリット

関わる回答が67あった。さらには、「体調が多少悪くても授業を受けられる」といったように体調の良し悪しに左右されないことをメリットとする回答がみられた。

「時間」に関しては、時間をかけて課題に取り組めることや好きな時間に取り組める等のように自分のペースで課題に取り組めること、「自分の時間がたくさんあるので、色々なことについて深く勉強できる」等のように学びを深める時間を確保できることをメリットとしている回答があった。この点については「資料」においても「何度も見返すことができる」「復習がしやすい」という記述がみられたことから、オンデマンド型遠隔授業のメリットとされている常に資料を閲覧できる状態にあることと関連していると考えられる。

「学習環境」においては、「静か」「落ち着ける」「リラックスできる」のように快適な環境で受けられることや「集中できる」といった記述が多くあった。また、「恥ずかしさや」「他の人の顔が見えないため自分の意見がいえぬ」のように対面授業において周囲の目を気にしながら取り組まざるを得ない学生が複数人いたことが明らかになった。「学習環境」に感じるメリットとして共通してみえることは、1人で取り組むことにより学習に向かいやすいということであった。このことは「自分で疑問に思った言葉を調べることが多くなった」「自分で考える力がつく」といったように、「主体性」とも共通して感じられたメリットといえる。

文部科学省からの配慮事項には遠隔地からの通学者への配慮が示されており、本学においても対面授業になってからは発熱をはじめとする体調の悪さに関してはできる限り欠席を促す形をとっている。この点を踏まえると、遠隔地から通学する学生や体調不良の学生に対しては、対面授業を実施する際も遠隔授業の活用を検討する余地があると考えられる。また、移動するからこそ生じる忘れ物や遅刻への言及もなされていた。しかし、睡眠時間、忘れ物、遅刻をメリットとする回答については、生活習慣の形成という視点からすると保育者養成校としては決して好ましいとはいえない結果であったと感じられる。

Ⅱ-2 遠隔授業で感じるデメリット

「現在の遠隔授業で感じるデメリットを教えてください」という設問に対して表1で示した分類を基に算出した回答の総数は328（2年生148、1年生180）であった。最も多かった回答は「学習環境」（81）であった。次いで、「質問（相談）」（66）、「学習負担」（41）、「意見共有」（31）という結果であった（図2）。

「学習環境」については、パソコンやプリンター等の機器環境が不十分であることや提出されたかどうかの不安、Wi-Fi環境や通信量等の通信環境に関する記述が多くみられた。その他に「誘惑が多い」「だらけてしまう」といった学習姿勢への影響も述べられていた。また、「質問（相談）」については、質問と回答のタ

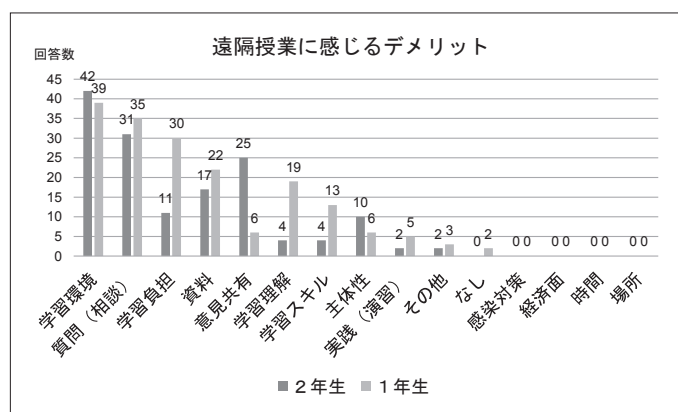


図2：遠隔授業で感じるデメリット

イムラグをデメリットに感じている学生が多く、5月1日に文部科学省より示された「学生一人一人へ確実の情報を伝達する手段や、学生からの相談に速やかに応じる体制が確保されていること」¹⁴に対する本学の課題として浮かび上がった。なお、「学習負担」「学習スキル」「学習理解」については、2年生に比べて1年生で感じている傾向が強く、大学での対面授業を経験していない中での遠隔授業であったことが影響していると考えられる。

また、子ども学科としては、スマートフォンで受講することやプリンターの所持が十分でないといった学生の状況を考慮した授業内容にすることが教員に求められてきた。そのため、紙媒体での資料を要する場合は事前に郵送する等の対応をとってきた。しかしながら、授業を進行していく過程において必要に迫られ、プリントアウトの必要性が出てくることは十分に予想でき、授業内容はもちろんのこと機器の整備等の教員側としての対応は必要であろう。プリントアウトに関しては別に設問を設けているため後に詳述する。その他に、「教科によってパソコンを使わないといけない。先に連絡して欲しかった」という回答については、平等な学習環境の確保という視点からすると、授業内容だけではなく、機器を貸し出す等の支援の方向性も含めて検討する必要があるだろう。

II-3 オンデマンド遠隔授業の賛否

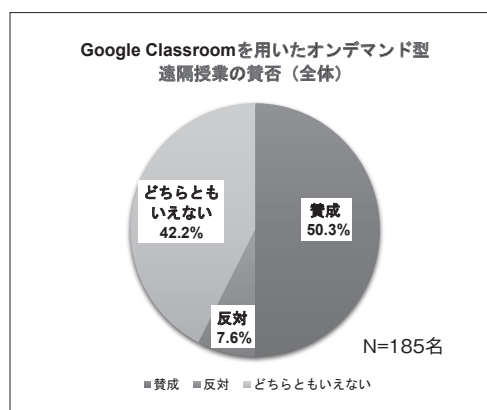


図3：オンデマンド型遠隔授業の賛否 (全体)

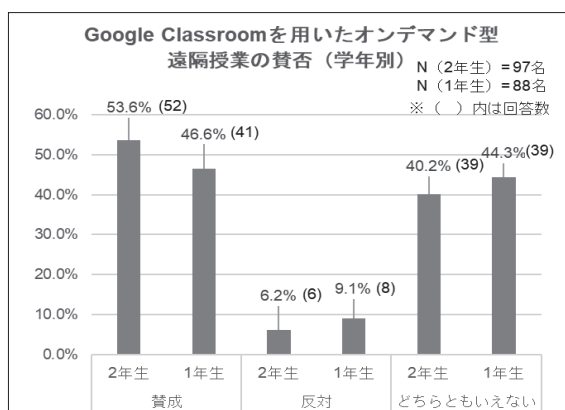


図4：オンデマンド型遠隔授業の賛否 (学年別)

遠隔授業の実施に当たって、今年度の実施方法に関する賛否を質した。学生の回答としては、賛成が93名 (50.3%)、反対が14名 (7.6%)、どちらともいえないが93名 (42.2%)であった (図3)。学年別にみると、2年生は賛成52名 (53.6%)、反対6名 (6.2%)、どちらともいえないが39名 (40.2%)、1年生は賛成41名 (46.6%)、反対8名 (9.1%)、どちらともいえないが39名 (44.3%)であった (図4)。学年毎の割合からみても大きな差はみられず、今回の遠隔授業に関する満足は得られていると考えられる。

ここで、オンデマンド型遠隔授業の賛否に対する学生の具体的な記述をいくつか紹

¹⁴ 文部科学省 (2020)「遠隔授業等の実施に係る留意点及び実習等の授業の弾力的な取扱い等について」(令和2年5月1日) p. 2.

介しておく。ただし、賛成と反対の意見に関しては、上述したメリット・デメリットの記述とほぼ同様であるため、「どちらともいえない」と回答した理由についてのみいくつか挙げておくこととする（表2）。

表2：オンデマンド型遠隔授業の賛否に対して「どちらともいえない」と回答した理由（一部抜粋）

「どちらともいえない」と回答した理由（一部抜粋）
Google Classroomでの授業はやりやすいが、授業内での先生の言葉での解説がないとスライドの内容だけではわかりにくいところが多く、また、他の学生との意見交流ができず授業内容を中途半端に理解した感じがした。
動画を添付してくれるとより分かりやすい。
もう少し授業の質が上がれば今のやり方には賛成できる。
今まで通りの遠隔授業に加えて、ZoomやGoogle meet等を使った授業を少し取り入れると理解が深まったり、簡単に意見を交換することが出来ると思う。
Zoom等のオンライン授業はあまり気が向かないが、YouTube等を使っての映像授業の方が理解できるのではないかと思ったから。
スライドだけでできる教科はそのままがいいと思うが、スライドだけで理解できない教科がいくつかあり、それらの科目は動画配信したほうが伝わりやすいと感じた。
デメリットが多いが、自分で考える力がつく。
対面授業やテストになった時にしっかり理解した上で解けるかがとても不安。

「どちらともいえない」と回答した理由の中には、本学のオンデマンド型遠隔授業に対する要望とも捉えられる記述が散見される。授業改善としては貴重な資料になるとは考えられるが、紙幅の都合もあることから、本研究では学生の現状を把握することに注力し、具体的な提案に関する内容に関しては詳細に検討する必要性があることのみここで述べておくこととする。

Ⅲ. 2回目（対面授業再開後）の調査結果

1回目の調査より2年生と1年生では従来の子ども学科の授業を受けた経験の有無が回答の差の要因の一つと考えられた。そこで、改めて遠隔授業と対面授業を比べた調査も設けた。なお、重複する内容もあることから既存の論述に関しては割愛しながら論を進めていくこととする。

Ⅲ－1 理解のしやすさ

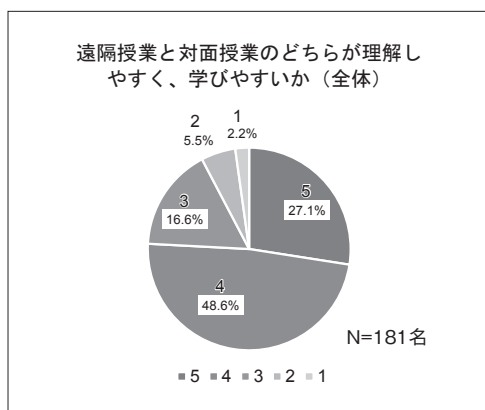


図5：遠隔授業と対面授業のどちらが理解しやすく学びやすいか (全体)

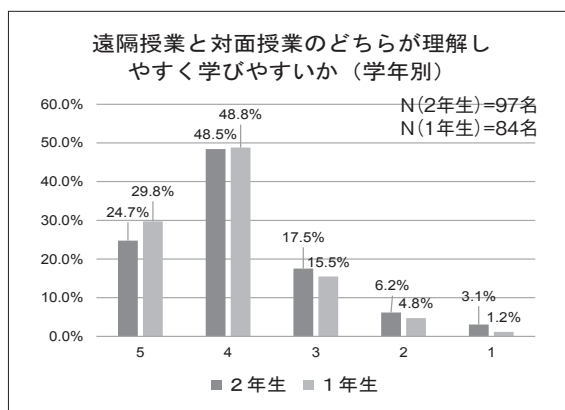


図6：遠隔授業と対面授業のどちらが理解しやすく学びやすいか (学年別)

「遠隔授業と対面授業ではどちらの方が理解しやすく、学びやすいと感じますか」という質問について、対面授業の方が理解しやすく、学びやすいを「5」、遠隔授業の方が理解しやすく、学びやすいを「1」として評価を求めた。全体としては、「5」あるいは「4」と評価した学生が137名 (75.7%)、「2」あるいは「1」と回答した14名 (7.7%)と大きく差があり、4分の3を超える学生が対面授業の方に理解のしやすさと、学びやすさを感じていることが明かとなった (図5)。こちらも2年生と1年生での回答に大きな差はみられなかった (図6)。

Ⅲ－2 対面授業に対して感じるメリット・デメリット

遠隔授業と比べた際の対面授業で感じたメリット、デメリットに関しては、1回目の調査と同様表1の視点で分類していくこととする。

(1) 対面授業に対して感じるメリット

「遠隔授業と比べての、対面授業で感じたメリットを教えてください」という質問に対して、181名 (2年生97名、1年生84名) が回答している。なかには対面授業のメリットを質しているにも関わらず、遠隔授業のメリットと捉えられる回答がみられたため、分析対象から除外し、本項目に関しては173名の記述を対象とした。記述の総数としては238であった。

記述が最も多かった項目は「意見共有」(59)、「質問 (相談)」(59)であり、次いで「資料」(47)、「学習環境」(35)、「実践 (演習)」(20)であっ

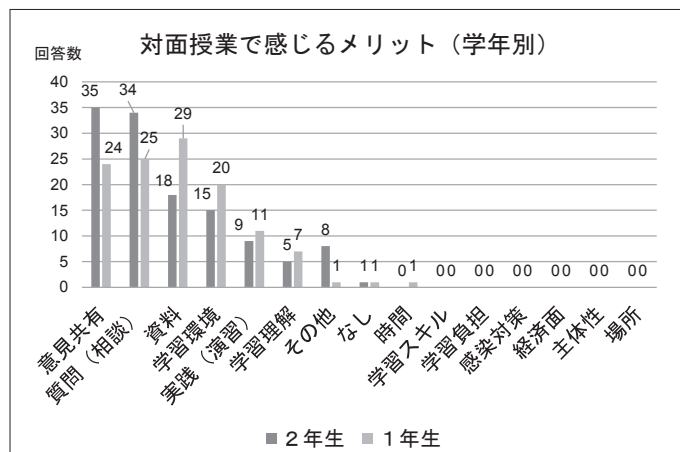


図7：対面授業感じるメリット (学年別)

た（図7）。

「意見共有」については「直接話せる」等のコミュニケーションに関する記述がみられた。「質問（相談）」では、「すぐ質問できる」といった即時的な対応をメリットと捉える記述が59名のうち42名から述べられていた。

「資料」「学習環境」「実践（演習）」ではいずれも1年生からの回答数が多く、「資料」では、「全部初めて知ることばかりなので分からないことしかなくて文章では理解できず、見るだけになってしまっていた」という記述があり、詳しい口頭での解説をメリットと感じている回答が多くみられた。さらに、資料（プリント）の配布をメリットと捉えている記述が3あり、紙媒体での資料が理解につながると捉えている記述がみられた。

「学習環境」については、集中できることや緊張感があること、周囲に人がいることで「やらなければいけないという気持ちになる」や「共に学んでいると実感でき、学習に積極的に取り組める」といった記述がみられ、周囲に人がいるという環境を学習面でのメリットと捉えている記述が多くみられた。ただし、対面授業のメリットに対して「なし」という回答がみられたことから、遠隔授業のみを希望している学生がいることも事実である。この辺りに関しては、授業内容や実習を要する保育者養成といった様々な視点から今後詳細に調査していく必要があると考える。

（2）対面授業に対して感じるデメリット

「遠隔授業と比べての、対面授業で感じたデメリットを教えてください」という質問に対する記述の総数としては194であった。

記述が最も多かった項目は「場所」（54）であり、次いで「感染対策」（28）、「学習環境」（25）、「なし」（24）であった（図8）。

「場所」については、全体を通して通学や教室の移動時間に負担を感じている学生が

多くみられ、2年生の記述数が15であったのに対して1年生が39あり、通学や授業毎に教室を移動することに慣れていない様子が窺える。これは、例年の1年生の入学当初の状況と変わらないとも考えられ、遠隔授業と対面授業の関係によるものかどうか、対面授業を継続していくうちに結果が同じになるのか等、ここでは判断できない。

「感染対策」としては、通学時における不安や教室環境、他の学生と接すること等の不安に関して記述されている。「学習環境」については、感染対策としての換気を意識的に行っていることから寒さに関する記述が3あった。今後、寒さが増してくる状況や降雪の状況に対して、感染対策をしながら対面授業を継続していく施設的な改善を要する視点である。同様に換気については、廊下や近隣教室の音が聞こえてくる等の記述があることから、学習環境を阻害する要因になっているようである。

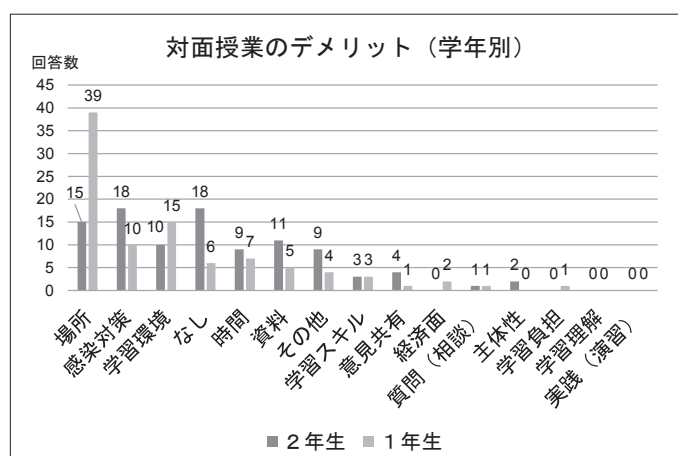


図8：対面授業で感じるデメリット（学年別）

また、資料やインターネットを用いながら授業を受けられない、集中力が途切れてしまう等の記述もみられた。さらに、話し声や音等、騒音によって学習に向かえないという記述が9みられる。これは遠隔授業中に快適な環境を自らで選択しながら受講できていたからこそ浮かび上がってきた教員側の課題である。次いで記述が多かった「時間」や「資料」であるが、これは遠隔授業のメリットと相反するものとしてみる事が可能であり、「時間」であれば自分のペースでできないこと、「資料」であれば繰り返し資料を閲覧できないことの記述が多くみられた。

Ⅲ-3 学生の通信環境に関する実態調査

本学では学生の通信環境等への配慮について、2020年4月6日に文部科学省より通知された「大学等における遠隔授業の実施に当たっての学生の通信環境への配慮等について（通知）」に示されているように、教材の低用量化や教室やPCルームの開放等に努めてきた¹⁵。それでは、学生の実態はどのようなものであったのだろうか。以下、調査結果を示していく。

(1) 居住地（自宅・下宿など）におけるインターネット接続環境

「あなたの現在の居住地（自宅・下宿など）でインターネットに接続する環境がありましたか」に対する回答としては、あったが175名（96.7%）、なかったが3名（1.7%）、遠隔授業のために新たに設置したが3名（1.7%）いた（図9）。ほぼ全ての学生においてインターネットへの接続環境が遠隔授業前より備わっていることが明らかとなった。ただし、少なからず接続環境がない学生や新たに設置した学生がいたことから、今後支援体制の充実の面からの課題も浮かび上がってきたと考えられる。

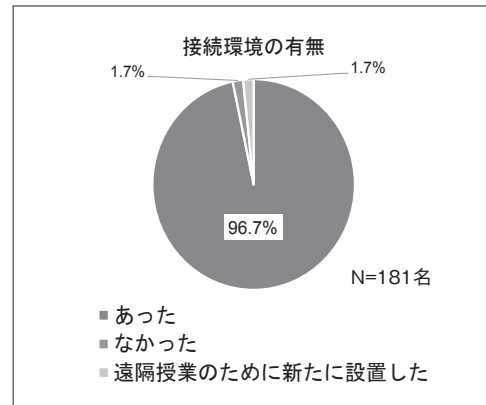


図9：接続環境の有無

¹⁵ 文部科学省からは、「十分な通信環境を持たない学生に対しては、地域における新型コロナウイルス感染症の影響の程度にもよりますが、大学等の教室やPCルームを開放する、PCやルーター等を貸与する等の方法により対応することが考えられます」と学生の通信環境への配慮について通知されている。

文部科学省（2020）「大学等における遠隔授業の実地に当たっての学生の通信環境への配慮等について（通知）」（令和2年4月6日 2文科高第36号）

（2）通信料制限の実態

「あなたは遠隔授業を受講したことによって、通信量制限を受けましたか」に対する回答として、通信料の制限を受けた学生が6名（3.3%）いたことが明らかとなった（図10）。この点に関しては、前述した学生サポート・クラスにより注意喚起が行われていたものの、受講環境を十分に確保できない学生が存在したことを示している。

通信量の制限を受けた6名に関して、前述した接続環境の回答をみると、接続環境のあった学生が4名、なかった学生が1名、新たに設置した学生が1名であった。先に挙げた4月6日の文部科学省の通知の中には、ルータ等の貸与についても記されており、通信量制限を受けた学生がいた事実を踏まえ今後支援体制について検討していく必要があるだろう。

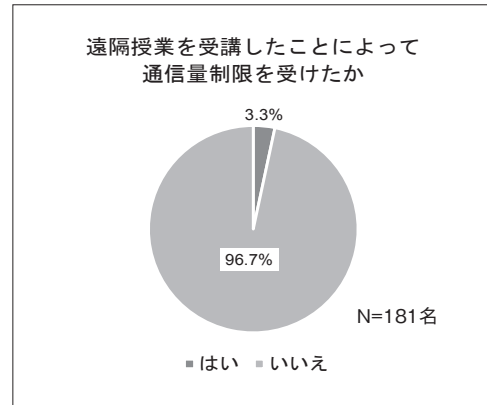


図10：遠隔授業を受講したことによって通信量制限を受けたか

（3）遠隔授業期間中の受講場所

受講場所に関しては自宅が178名（98.3%）、大学（図書館）が1名（0.6%）、その他が2名（1.2%）であった（図11）。

ほぼ全ての学生が自宅での受講を行っていた。上記の設問と合わせて考えた時、機器環境が整っていない学生や通信量の制限を受けた学生がいたにも関わらず大学の開放を活用していない学生がいたことから、自宅での受講状況を平等かつ充実したものにするための支援を考える必要があると考えられる。ただし、今回の設問に関してはアパートや下宿を組み込んでいなかった。アパート等によっては通信環境（Wi-Fi等）の提供がなされているケースもある。さらに、県外に実家がある学生に関しては、対面授業開始後に県境を越えることをためらい、アパートで受講していたことも予想できる¹⁶。支援の方法を考える上でも、詳細に調べるべきであり、設問内容に関する課題として残った。

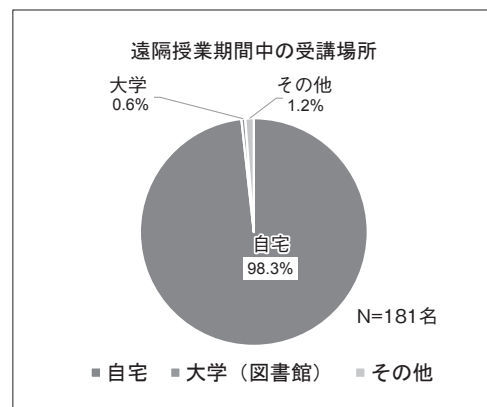


図11：遠隔授業期間中の受講場所

¹⁶ 学生に対しては、6月9日より対面授業を実施することが遠隔授業開始時点で周知されていた。

(4) 遠隔授業受講に際して利用したネットワーク接続機器

「遠隔授業を受ける際に利用した主なネットワーク接続機器は何ですか」という設問に対しては、回答数が多い方からスマートフォンが120名(66.3%)、ノートパソコンが自分専用、家族で兼用ともに26名(14.4%)、家族兼用のデスクトップパソコン、タブレットが4名(2.2%)であった。また、大学で貸し出しているパソコン(コンピューター室を含む)を使用している学生はいなかった(図12)。

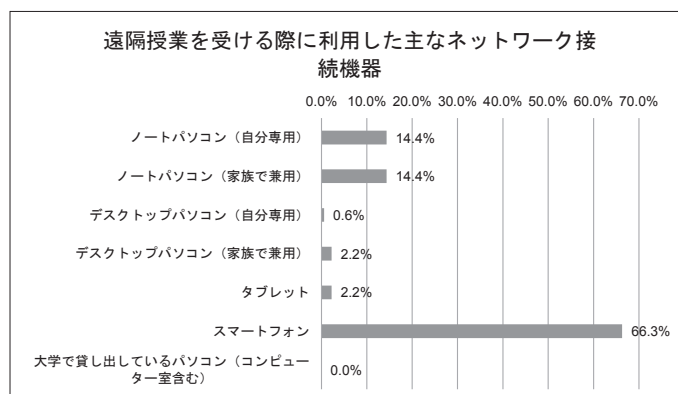


図12：遠隔授業を受ける際に利用した主なネットワーク接続機器

本学では貸し出し用のパソコンの充実をはかっているところではあるが、現在の実態としては遠隔授業に際して学内におけるパソコンの貸し出しを求めている学生がいなかったことが明らかとなった。前述した受講場所の状況やネットワーク環境に関する設問と合わせて考えると、学生が学内に求めている学習環境とすれば、Wi-Fiの有無であることが推測される。その他にもパソコンの操作に関する不慣れさが影響しているとも考えられ、授業内容やカリキュラムの検討の視点からも詳細な調査が必要であると考えられる。

(5) 遠隔授業におけるプリントアウトへの対応

「遠隔授業の期間中、プリントアウトの必要性があった(必要だと感じた)授業はありますか?」という設問に対しては、求められる授業があったが100名(55.2%)、した方が良かった時があったが62名(34.3%)、必要性はなかったが19名(10.5%)であった(図13)。この結果から、プリントアウトの必要性があった学生は89.5%であった。さらに、「遠隔授業の期間中、プリントアウトの必要性がある場合、あなたはどこでプリントアウトを行いましたか(行ったと思いますか)?」に対する回答としては、自宅が93名(51.4%)、大学が14名(7.7%)、コンビニエンスストアが70名(38.7%)であった(図14)。つまり、約9割の学生がプリントアウトの必要性があったにも関わらず、約半数(46.4%)の学生が自宅外でプリントアウトを行っているということである。

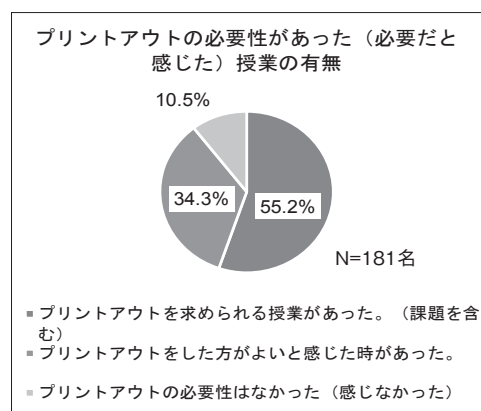


図13：アウト必要性の有無(全体)

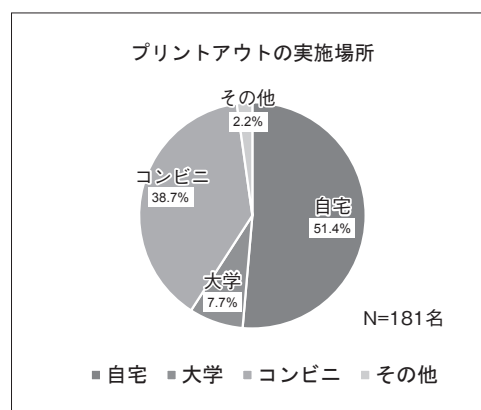


図14：プリントアウトの実施場所

先に述べたように、本学としてはプリンターを所持していない学生に配慮するため、紙媒体としての必要性がある資料に関しては授業実施前に郵送するといった対応をしてきた。しかしながら、実態はなかなか浸透していなかったことが課題として浮かび上がった。さらに、自宅で授業を受けていることに加えて外出自粛を求めているにも関わらず、コンビニエンスストアや大学まで足を運ばざるを得ない状況を作り出してしまうことについて、授業内容や課題の提出方法が正しかったかどうかは疑問が残る。この点については、授業内容はもちろんのこと学習環境の支援という意味からも課題であり、遠隔授業を実施するには検討を要する視点であると考えられる。

（6）遠隔授業のために新たに準備したもの

「遠隔授業のために新たに準備（購入）したものはありますか？（複数回答可）」については、多い回答からみていくと、新たに準備したものはないが135名（74.6%）、ノートパソコンが29名（16.0%）、プリンターが12名（6.6%）であった（図15）。

上述した遠隔授業で利用した接続機器としてノートパソコンを利用した学生が52名であり、そのうち26名が自分専用であったことと合わせて考えると、自分専用のパソコンを所持している学生数の少なさが浮かび上がってくる。

子ども学科という視点からみてみると、実習の際の部分案や卒業研究、レポート等でパソコンを使用する機会は非常に多い。そのため、遠隔授業を契機として学生の機器環境が充実したという視点においては有意義な状況にあったと捉えることもできる。ただし、パソコンの所持率が少ないことに関しては、平等な学習環境の提供という視点からみたときに施設面での支援が必要であったとも考える。また、本学全体として遠隔授業の方法を考える上で、スマートフォンを利用して受講することを想定していたことに関しては的を射ていたことがここで確認された。一方で、パソコン操作を前提とした授業内容があったこともアンケート結果から明らかとなっている。教員の共通理解が必要な面であろう。

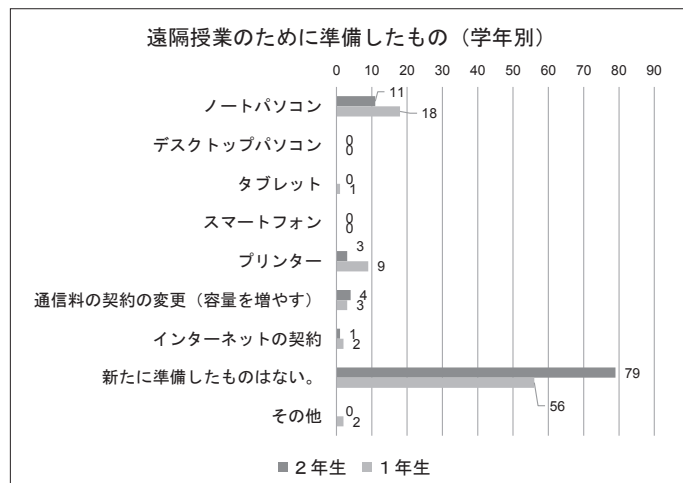


図15：遠隔授業のために準備したもの（学年別）

Ⅲ-4 遠隔授業における疲労感

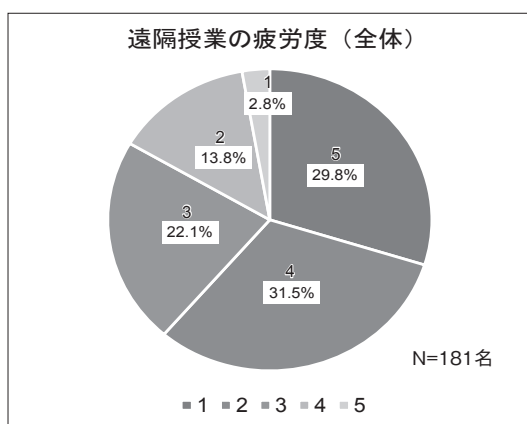


図16：遠隔授業の疲労度 (全体)

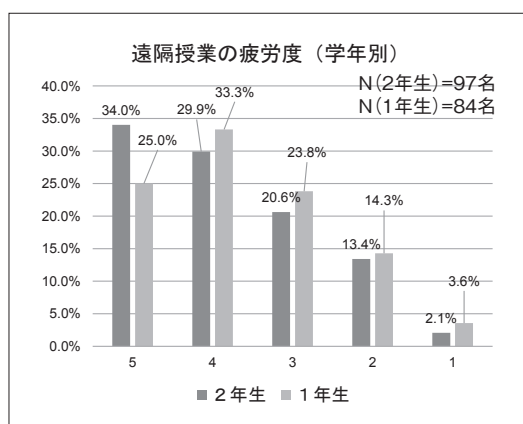


図17：遠隔授業の疲労度 (学年別)

「遠隔授業を受講した際の疲労度を教えてください。通常の対面授業と比べて評価してください」という設問に対しては、対面授業より疲れなかったを「5」、対面授業より疲れたを「1」として評価を求めた。全体としては、「5」あるいは「4」と評価した学生が111名(61.3%)、「2」あるいは「1」と回答した学生が30名(16.6%)と大きく差があり、遠隔授業の方が疲労を感じていないという実態が明らかとなった(図16)。こちらも2年生と1年生での回答に差はみられなかった(図17)。

既に述べてきた遠隔授業に感じているメリット・デメリットと合わせて考察すると、遠隔授業のデメリットの中には、機器の画面を見続けることによる目の疲れや同じ姿勢を保つことで生じる腰の痛み等に関する記述がみられる。加えて、1人で受けることによる不安感等の精神的な面も記述されている。また、対面授業のデメリットには、通学で生じる睡眠不足や準備に関する負担、移動(家から大学、授業間の教室移動)に関する記述がなされている。したがって、今回は疲労度という枠の中で設問しているが、今後の調査に関してはこの辺りを念頭に置き設問内容を検討していく必要がある。

Ⅲ-5 遠隔授業と対面授業の学生評価

(1) 遠隔授業と対面授業に対する全体評価

「遠隔授業と対面授業のどちらの方がよいと思いますか」について、対面授業の方がよいを「5」、遠隔授業の方がよいを「1」として評価を求めた。全体としては、「5」あるいは「4」と評価した学生が101名(55.8%)、「3」と回答した学生が44名(24.3%)、「2」あるいは「1」と回答した学生が36名(19.9%)であった(図18)。半数以上が対面授業の実施を求めているという実態が明らかとなった。こちらも2年生と1年生での回答数に大きな差はみられなかった(図19)。この点に関しては評価の理由について記述を求めているため、次に評価毎に項目を分け述べていきたい。

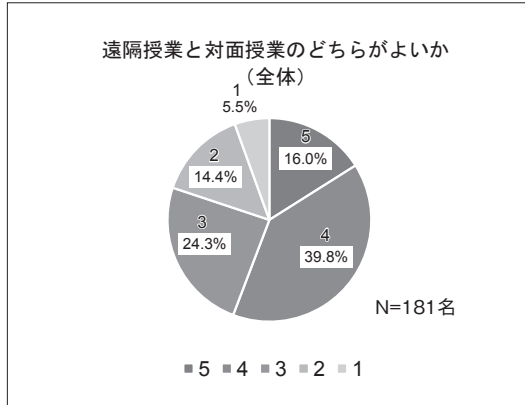


図18：遠隔授業と対面授業のどちらがよいか（全体）

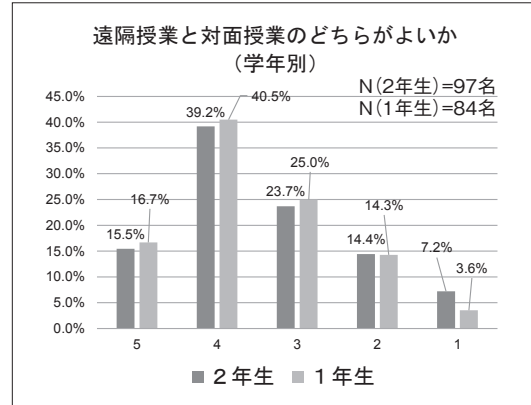


図19：遠隔授業と対面授業のどちらがよいか（学年別）

(2) 対面授業の方がよい（評価「4」、「5」）と答えた学生の記述

対面授業の方がよい理由として、「学習環境」が49と最も多く、次いで「学習理解」(20)、「質問(相談)」(16)、資料(14)、意見共有(13)であった(図20)。「学習環境」については、「1人でやるよりみんなでやった方が学びが深まる」や「友達と一緒に学習していることが実感でき、モチベーションも上がる」といったように、他者と交流したり、学びの空間を共有する

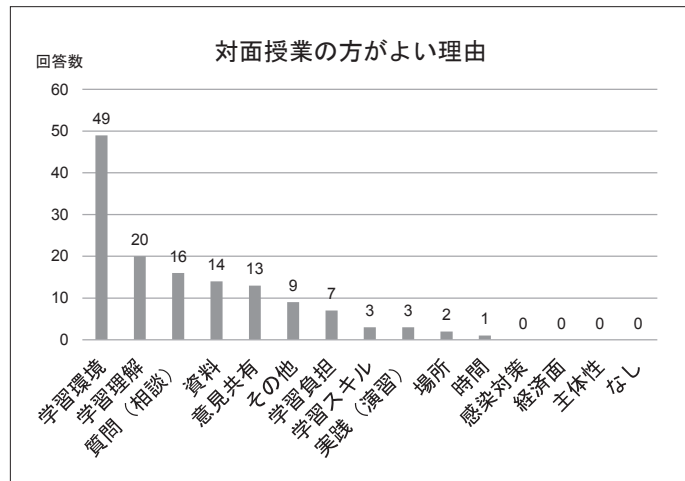


図20：対面授業の方がよい理由

ことが対面授業のメリットとして感じている記述が12みられた。さらに「オンオフの切り替えがしやすい」や「真剣に取り組める」、「実際に活動した方が学んだ感じがあ

る」等の精神的な面に関する記述、機器環境や通信環境について触れている記述がみられた。「学習理解」や「資料」に関しては、資料だけではない口頭による説明をメリットとして感じている記述、「質問(相談)」や「意見共有」に関しては即時的な解決を求めている記述がみられた。

(3) 遠隔授業の方がよい（評価「2」、 「1」）と答えた学生の記述

遠隔授業の方がよい理由として、「感染対策」が13と最も多く、次いで「学習環境」(11)、時間(9)、場所(8)であった。「感染対策」においては、電車等の通学時、人の多い場所で過ごす時間等への不安感が記されていた。感染への不安感に関しては家族が心配していることに関する記述もみられる。「学習環境」では一人の時間で集中できることや静かな環境で落ち着いてできること、「時間」では自分のペースで勉強できること、「場所」では通学に関わること等が述べられており、これまで述べてきた遠隔授業のメリット・対面授業のデメリットとも共通している。

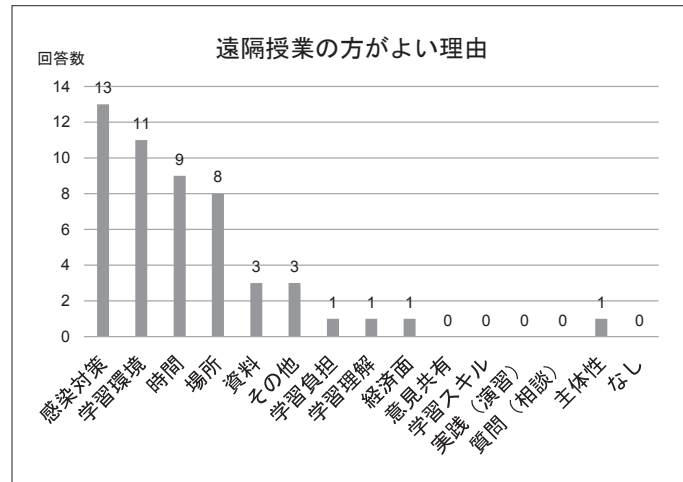


図21：遠隔授業の方がよい理由

IV. 結びにかえて

本稿は、授業方法に関する大きな転換期をむかえた今年度の状況において、遠隔授業と対面授業を経験した学生の実態について報告をしたものである。長期間の遠隔授業に対する不安感はもちろんであるが、これまで当たり前に行っていた対面授業時に対する要望や不満が少なからず露呈したものである。

結果としては、遠隔授業期間中の遠隔授業に感じるメリットが303、デメリットが300であり、ほぼ同数の意見がみられたことに対して、対面授業に感じるメリットが238、デメリットが194と少なからず差が出ている。そして、デメリットが多く挙げられながらも、対面授業を要望する声が多く上がっている。理由としては、対面授業のメリットとして、即時的に質問や相談ができるという回答が多くみられ、それは同時に遠隔授業に対する不満としても浮かび上がっていた。Google Classroomには受講者と連絡を取り合う機能があるものの、通知の有無等から即時的な対応に向いていない一面もあった。本学では、教職員、学生の全員に本学アカウントのGmailのアドレスを配布しており、学内の連絡で既に多く用いられてきていること等を踏まえると解決の手立てはあると考えられ、早急に対策を講じる必要があるだろう。この点について、文章での説明だけでは不足する部分があるという回答があることに関しては、教員の資料作成に対する指摘とともれる課題である。さらに、コミュニケーションに関する記述では、友人と会えることそのものや友人と会うことでモチベーションが上がるといったような回答がみられた。これは大学という場が、グループワーク等の演習や実習等の実践場面を想定する等の学びの場に留まらないことを示している。

そして、遠隔授業に対して、学生はそのやり方に順応してきており、さらには世の中の状況から遠隔もやむなしという思いからか決して否定的な意見ばかりではなかつ

た。加えて、遠隔授業に関して意見共有ができることに対する評価が高いことから、教員側の工夫する態度が感じられる。教員としても初めての連続ではありながら、遠隔授業に対して学生から一定程度の満足を得られていること、そして遠隔授業と比べた際の対面授業に高い評価を得られたことは、教員にとって従来の授業方法を見つめ直さざるを得ないことが功を奏したとも考えられ、継続的な取り組みが必要であろう。しかしながら、郵送等の対応をとってはきたものの、プリンターの使用状況に関して多くの声が上がっていることから、授業内容や方法に関する教職員の共通認識に向けた取り組みはもちろんのこと機器の支援の視点からの検討も行う必要があると考えられる。

一方で、学生が求めている意見共有や質問・相談の即時的な対応にも疑問が残る。それは、遠隔授業のメリットとして自学習への意識が出てきているといった記述が複数みられたこととも関係している。不明な点に対してすぐに質問できる良さ、それが主体的に自ら学びを進めていく力の育成と一致しているのか、この辺りは子ども学科の求める「子どもと歩む保育者」つまりは学び続ける人材の養成にとっても重要な視点である。

現在叫ばれている保育の質の向上に関する取り組みは、就職後の各園による研修のみならず保育者養成の段階においても視野に入れるべきこととして受け止められている。現在の状況は保育者にとっても前例のない不測の事態である。そうした中、文部科学省からは、2020年5月13日に「新型コロナウイルス感染症への対応のための幼稚園等の取組事例集」が、9月7日には「幼稚園等再開後の取組事例集」が公表されており、様々な園がアイデアを出しながら保育を継続している姿勢がみてとれる。保育者養成課程の特に2年生にとっては、現在授業を受ける立場でありながら、次の年度の4月には新たな取り組みに対して積極的に行動していかなければならない事態に直面する。こうした意識をいかに持たせるか。この授業に関しては現在進行中である。

今回の調査ではあくまで学生側の視点からの記述である。教員側の視点としては、遠隔授業によってGPA等を参考に成績がどのように変化したのか、あるいはディプロマ・ポリシーの達成度はいかなるものであったのかといった、学生の学びの達成度と授業形態の関係性等を実態に照らし合わせながら述べていく必要がある。加えて、対面授業との比較を行ったものの、数回の遠隔授業との比較でありかつ対面授業経験後の遠隔授業に対する調査を行えたわけではない。冒頭で述べたように、今回の調査に関しては継続的に取り組んでいく必要があり、この辺りを今後の課題としたい。

文献

- ・文部科学省（2020）「遠隔授業等の実施に係る留意点及び実習等の授業の弾力的な取扱い等について」（令和2年5月1日）
- ・厚生労働省子ども家庭教育保育課（2020）「新型コロナウイルス感染症の発生に伴う指定保育士養成施設の対応について」（令和2年3月2日）
- ・内藤徹（2020）「同志社大学商学部生の遠隔授業環境に関するアンケート調査結果報告書（資料）」：『同志社商学』第72巻、第2号、pp277-288.
- ・日本乳幼児教育学会第30回大会（2020年11月14日・15日）大会プログラム、p.58.

- ・三苫博・原田芳巳・山崎由花・内田康太郎・五十嵐涼子・大滝純司（2020）「対面授業は、オンデマンド型授業より優れているのか？」：『医学教育』51－3，pp.266－267.
- ・文部科学省（2020）「学事日程等の取扱い及び遠隔授業の活用に係るQ & A等の送付について（令和2年5月22日時点）」
- ・文部科学省（2020）「教育職員免許法施行規則等の一部を改正する省令の施行について（通知）」（令和2年8月11日 2文科教第403号）
- ・文部科学省（2020）「新型コロナウイルス感染症への対応のための幼稚園等の取組事例集（令和2年5月13日時点）」
- ・文部科学省（2020）「新型コロナウイルス感染症対策に関する大学等の対応状況について（令和2年5月12日時点）」
- ・文部科学省（2020）「大学における後期等の授業の実施方針等に関する調査結果」（令和2年9月15日）
- ・文部科学省（2020）「大学等における遠隔授業の実地に当たっての学生の通信環境への配慮等について（通知）」（令和2年4月6日 2文科高第36号）
- ・文部科学省（2020）「幼稚園等再開後の取組事例集（令和2年9月7日時点）」
- ・文部科学省（2020）「令和2年度における大学等の授業の開始等について（通知）」（令和2年3月24日 元文科高第1259号）
- ・文部科学省ホームページ「大学・大学院・高専に関する情報」https://www.mext.go.jp/a_menu/coronavirus/mext_00016.html（令和2年12月1日閲覧）